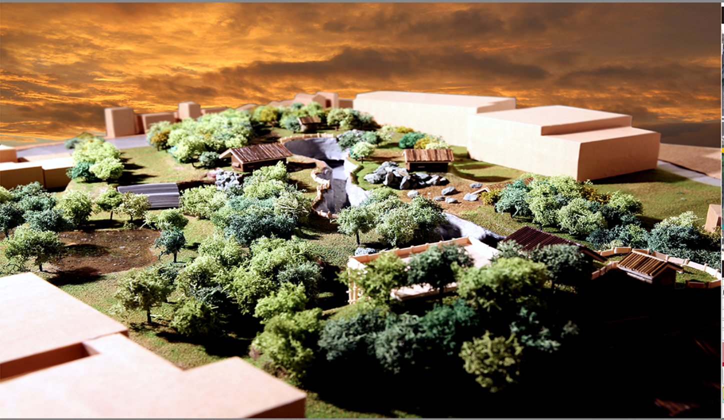
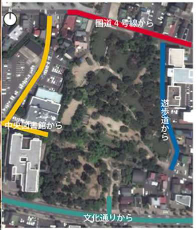
# 修験道資料館—見る・歩く・感じる—

科学万能主義の下、自然は、畏怖の対象から、支配・共生の対象になった。東日本大震災は、自然がそんな人の傲慢を諫めた出来事だった。
やはり畏怖こそが、自然と人との関係にふさわしい。忘れられた畏怖を、私たちが再び抱くには？
これは、修験道に学び、その精神を伝えるための資料館。



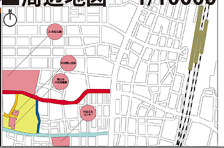
## ■敷地への 4 つのアプローチ



計画敷地とした福島県郡山市麓山（はやま）公園は、敷地のあらゆる方向からアクセスが可能だ。
中でも、国道からのアクセスが容易な北側と図書館のある西側からの利用が予想される。そのため、施設への導入部にあたる麓山宿（はやまじゅく）及び展示空間は敷地の北側に、これに次ぐ導入部である洞窟を西側に置く。
その他、南と東からの訪問者には、この敷地が持っていた公園としての性格を味わわせつつ、自ずと資料館の導入部である麓山宿（はやまじゅく）へと足を運ぶような計画とした。

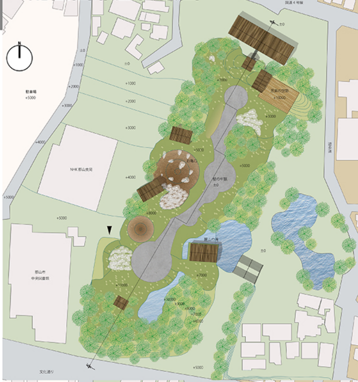
- 🟥 北側：国道 4 号線からのアプローチ
- 🟨 西側：中央図書館からのアプローチ
- 🟦 東側：遊歩道からのアプローチ
- 🟩 南側：文化通りからのアプローチ

## ■周辺地図　1/10000

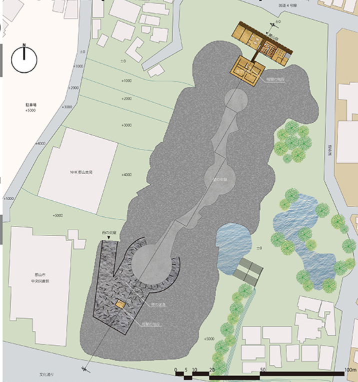


- 🟥 周辺施設
  - 21 世紀公園
  - 郡山市中央図書館
  - NHK 郡山支局
  - 郡山市文化センター
- 🟦 文化通り
- 🟫 郡山駅
- 🟨 計画敷地（麓山（はやま）公園）

## ■配置図兼屋根伏図　1/1000



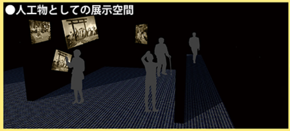
## ■平面図（GL+1000~5000)　1/1000



## ■全体構成

修験道の本質は、「人工物から自然物への回帰」である。本資料館では、この本質の表現を試みた。
すなわち、人工物である展示空間にて修験道への理解を深め、自然物としての山で思索する。この修験者の疑似体験を通して、私たちは、忘れていた自然への畏怖を取り戻す。

**●人工物としての展示空間**



回帰 →

**●自然物としての山**

**●展示物**

非文字資料（彫像・装束・道具・写真）

＋

文字資料（文献）

＋

見る

人工物としての展示空間で、
修験道への認知・理解を深める。

・　・　・　・

歩く

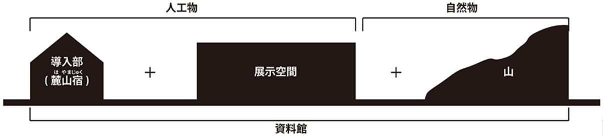
自然物としての山を散策し、
また、思索する。

・　・　・　・

感じる

## ■各種性質

人工物とは、導入部である麓山宿と展示空間の２つの部門の総称である。訪問者はこれらの場所で、修験道への理解を深める。
自然物とは、その後に続く山の事を　指し、この山を散策し、そこでの思索を通して、自然への畏怖を再認識する。
これら２つの総称が、本計画「修験道資料館」である。



人工物　　自然物

導入部（麓山宿（はやまじゅく））＋ 展示空間 ＋ 山

資料館

## ■8 つの靡（なびき）を巡る

修験者は修験の中で、「靡（なびき）」に祈りを捧げながら山を巡るという。靡とは、山の要所に点在するパワースポットのようなものであり、これを巡る事が、修験における目的の１つでもある。

**●麓山宿（はやまじゅく）**
山に埋もれる展示空間への導入部。資料館の人工物に当たる部分であり、休憩の場も兼ねる。

**●暗闇の階段**
人の心を浄化する作用を持つ暗闇に身を浴しながら、「胎内めぐり」を体験する場。

**●思索の空間**
山に登ると、懸造の舞台に出る。「暗闇の階段」で浄化された心で、山を眺めながら思索にふける場。

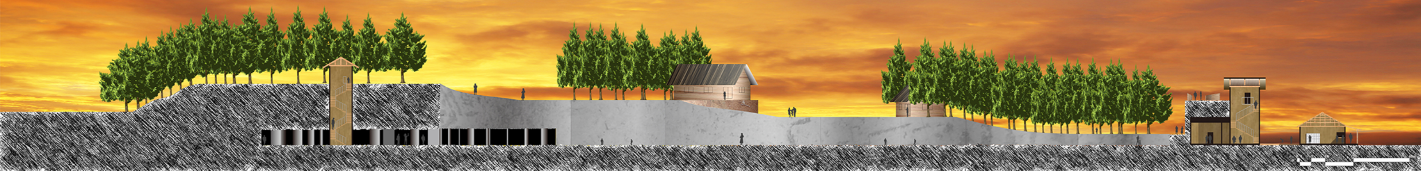
**●お亀石**
秘歌に「お亀石踏むなたたくな杖つくな」とある。触れてはならない清浄で神聖な自然の表徴。

**●麓山（はやま）の滝**
山央には滝。水音は山全体に響き、人の心を洗う。

**●西の洞窟**
西から敷地に至ると視界に入る洞窟の入口。山にもぐり、異界へと誘う。

**●壁の迷路**
洞窟に足を踏み入れると、無数の不規則な壁。暗闇の中、光の射す方向に進むと、「壁の牢獄」に出る。

**●壁の牢獄**
山央のくぼみには人工的な壁。人口と自然との対比と、包含関係の象徴。傲慢な人の迷走は自然に諫められ、自然に導かれる以外に道がないことの暗示。

## ■A-A′ 断面図　1/300